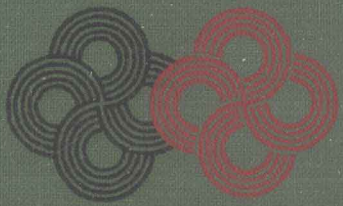

春波楼筆記＝司馬江漢
瓦礫雑考＝喜多村信節
紙魚室雑記＝城戸千楯
桂林漫録＝桂川中良
柳亭記＝柳亭種彦
尚古造紙挿＝暁鐘成

2

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第一巻
昭和二年四月廿八日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉2
昭和五十年三月二十日　印刷
昭和五十年四月　五日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京二四四番
製　作＝株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、春波楼筆記、瓦礫雑考、桂林漫録、柳亭記、尚古造紙挿の五種を収める。

春波楼筆記　一巻　　司馬江漢　著

本書は文化八年四月から十月迄に稿が成った、著者晩年六十五歳の随筆である。画人として、科学者として世を送った其の見聞随記と云うべきもので、此の新旧時代、文物混流の中に一世を送った、偉彩ある人物の雑筆として、其の時代を知ると同時に、其の人を知る上には、欠かせぬ文献である。黒田源次著『司馬江漢』には、本書の引用が殊に多く、中にも「江漢後悔記」の一文は、興味深いものがある。只其の享年を八十一歳とし、又七十二歳と自記した事から混乱が生じたが、今は黒田博士の攷証によって七十二歳説に定着した事である。此の「後悔記」の外にも興味ある記事に、一休和尚の狂詩、貧福論、応挙の画風、相人石竜子の事、天愚孔平の事など、項目を挙げれば際限がない。この石竜子の家は芝愛宕下で、大正頃にも未だ栄えていたようで、秋田藩の御留守居を勤めた杉浦露介老人（秋田藩の留守居を勤め書を能くし、又漢詩俳句を楽みとす。晩年賞勲局に勤む。）の話に、赤竜子の老人には東郷大将等数人の後の名士を相して的中した話を語られた事を思い出す。大正時代の人は其の後の人で此れは洋行して家職に新智識を加えて流行したと聞いている。少々駄弁乍ら赤竜子の元祖を本書に見たので附記しておいた。現在も栄えておられようか。

本書は大槻修二氏が神田孝平氏の所蔵本を原本として写蔵したものを原本として、『百家説林』に収められ、流布したものである。

司馬江漢　名は峻、字は君岳、号は桃言、乙翁、西洋道人、春波楼、不言道人等、種々称した。俗称を安藤吉郎と云ったと云う。寛延元年に生れ、文政元年十二月二十一日歿した。享年七十二、深川本材木町日蓮宗慈眼寺に葬られた。戒名　桃言院快詠寿延居士。慈眼寺は今西巣鴨四ノ三八に移転した。現在史蹟指定になっている。

司馬江漢は東条琴台の父享哲と親しかった。依て、琴台は其のひととなりを知り江漢の銅版画十二図を蔵し、此れを二枚の挾に収めて居た。今此れが静嘉堂文庫の蔵に帰している。旧蔵者は大槻家である。この挾に左の識語がある。

通計十二図、江漢司馬氏此図鏤板、係文化三年丙寅三月大流伝最希、豈可不珍重乎、安政丙寅三月廿六日、琴台主人誌、

司馬峻、字君岳、号春波楼主人、江都四谷人、移居于芝新銭座宇田川裏街、漫遊四方、多与名流交歓、在于長崎五年、尽得和蘭可比丹所伝西洋画法而東帰、又与宇晋明卿、桂川国瑞公鑑等、講究横文窮理学、先考与之善、故余知其為人、文政元年戊寅十一月廿一日歿、歳七十二、所著天球全図考一巻、和蘭天説二巻、地球全図考、同略説各一巻、西遊旅談五巻、泰西輿地図説十巻、春波楼画譜三巻、其余未上梓者数種、

とある。此の記事は曾て細野正信氏に依って *Museum* No. 230 にも発表せられた所であるが、雑誌と云うものは索め難い物であり。江漢の四谷に生れた事は、他の資料には見えぬ事であるから抄記しておく。前掲黒田博士の江漢の研究では、其の生涯を五つに分けている。

第一期は幼少年時代で、早くから画をかく事を好んだ江漢は、父の命に依って狩野古信の門に入って正式に絵画の途に進む事を始めた。然し宝暦十一年十四歳にして、其の父を失った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第二期は青年時代である。宝暦十二年十六歳の江漢は、宋紫石（天明六年三月十一日歿、享年七十二）の門人となった。この事は同じ画人として身をたてる身として、大きな影響を江漢の一生に与える事になった。紫石は平賀源内とは親しかった。従って江漢も源内の門に出入する事になった。南蘋風の写実を尊ぶ画風に江漢も心を入れる一方、若い江漢は当時興隆して来た浮世絵にも興味を惹かれた。春信の偽作をもし、自ら春重とも称して自負した事もあった。

第三期は壮年期で、源内の手引で、前野、杉田、中川、桂川等の所謂蘭社の諸先生の知も得るに至り、杉田門下の大槻玄沢の協力を得て、『コンスト・シキルド・ブック』等を読破し、銅版術と蠟画の法を工夫して天下の耳目を聳動するに至った。

第四期は前期の延長で、寛政初年から文化五年に至る最も脂の乗った時代である。此の時代の特色は、自然科学、特に天文地理の研究に精力を尽した時代で、現在知られている油絵の大作は殆んど此の時代に製作されている。

第六期は、文化六年以後歿年に至る時期で、無言道人時代とも云うべき時代である。市井の啓蒙哲学者として、自由思想家として、『春波楼筆記』を初め、『無言道人筆記』『西遊日記』等の日記随筆を書き残した時代であった。

瓦礫雑考　二巻

喜多村信節　著

この著者のものは、大著『嬉遊笑覧』を初めとして、多くの著述が写本で伝えられてきた中で、本書は文政元年に刊行されている。内容は上巻は「千字文」以下十三条、下巻は「俗諺」以下二十条を収めている。其の大体は民間所用の服飾と飲食に関するもので、著者独特の精緻な考証随筆である。

文化丁丑秋八月（十四年）の自序と、友人の荻野梅塢の序とがある。梅塢名は長、字は元亮、号は蛇山病夫等とも称した。幕府天守番で、台教に精しく仏教学者として当時名を成していた。天保十四年五月十五日歿した。又本文の考証には挿画を添えて、一目了解を助ける事、他の著と同様で、自画はもとより、灯燈とつり鐘などは、喜多武清の筆になるものである。其の他本文中には高田与清、岩瀬醒斎（山東京伝）等の名も見え、当時の著者の交友関係等も察せられる。此れ等の考証類はすべて流れて、後年の『嬉遊笑覧』となって後世を益する事が更に広くなって行くことである。

さて本書で、京伝、与清等同時代の考証学者の出て居る事を注意したので、信節は此れ等の友人達を如何に見ていたかを窺って、其の人柄をも考えたい。幸い此れには斎藤月岑著『武江年表』に補正書入をしたものが流布している。此れによると、高田与清も山東京伝も柳亭種彦等も褒められてばかりはいない。一応は誹謗の的になっている。決して誰をも褒めてばかり居られない厳しさを持った人物であったようである。この事は森銑三氏が「喜多村筠庭の人物」の一文を昭和二年六月の『歴史地理』に発表して居られる。この文は後、同氏著『江戸時代の人々』にも収められた。

本書再刊に当っては、東京大学図書館蔵の坂田諸近の書入の写本をも参照、記入を行った。この本には、「坂田文庫」の印記があり、左のような識語がある。

弘化四丁未年十一月十三日、以望春平田氏本謄写於杉本書屋南廂机上、坂田諸近

この坂田諸近は、筑前秋月藩士で、国学者、有職故実の学に精しかった。学統は松岡辰方、同行義の門人である。其の門下から平野国臣が出ている事はまた注意すべき事であろうか。名は初め諸近であったが、藩主が近江守になられた時に、近の字を遠慮して諸遠と改めたと云う事である。維新後は新政府に仕え、外務省奏任御用係に任せられたと云う。歿年享年未詳である。

喜多村信節の略伝は、第二期四巻の「画証録」の解題の末に記したから、其れを見られたい。

紙魚室雑記　二巻

城戸千楯　著

本書は著と云うより寧ろ編とした方が或は正しいかも知れぬものであるが、著者が本居宣長等の門人であり、書肆であり、同志と鐸舎（ぬでのや）を経営した人だけあって、古学関係に見るべき記事が多い。

巻頭には「日本逸史」から「唐女為妻」の記事を抄記し、以下十余条抄記を続けている。当時「おかし」「をかし」の説が大いに諸家の関心があった事で、石原正明、長谷川菅雄、今村楽其の他の説を抄記している。又北野奉納百首には、当時の鐸舎関係の歌人の献歌が見られる。然し本書に於いて一番興味の持たれるものは、文政二年五月十二日に塙保己一、本居大平を鐸舎に会して、一夜物語を聞いた。其の時の抄記であろう。『群書類従』の版下を羽州亀田領主岩木伊予守が好んで書かれたと云う事なども見えている。もう一つ此のような抄記で注意すべきは、文政三年清水浜臣が上京中に、聞いて置いたと云う疑問会の事、縣居翁の跡の事などは、当時の文壇事情を物語る資料として注意されるべきものであろう。此のような国学関係の記事に交って、西村喜里の『居行子新話』の説を引いて小野小町数人説を注意している。小野小町は諸家の説も多く黒岩涙香にも其の論のある事は有名であるが、書誌学者で宮内省図書寮に居られた橘井清五郎翁には、小野小町男性論があって一夜ゆっくり御説を拝聴した事があったが、矢張日本第一の美女を抹殺してしまうのは、一寸心淋しい気がした。橘井翁についてはなお語るべき事もあるが余談であるから省略する。もう一つ本書中注意すべきは、以文会定として其の規約が出ている。而して種々出品の記事もあるが、次のような記事もある。

「〇遊女高尾文政九年丙戌五月十日以文会　小島典膳子筆記著作堂の珍蔵美地の久さうし、筆者陸奥人医師工藤平助女同藩只野氏嫁シテ仙台ニ在」と

あって、高尾は仙台侯の老女として一生を送り其の子孫として杉原重太夫があると云う記事もある。この「美地の久さうし」は、中山栄子著『只野真葛』にも見えないようである。本書無窮会蔵写本に拠った。

城戸千楯（きどちたて）　姓は大江、名は千楯、経正、通称は万治郎、範次、恵比須（蛭子）屋市右衛門と云った。号は紙魚室（シミムロ）、蠹室（シミムロ）また鐸舎（ぬでのや）とも云って、京都の書肆であった。安永七年京都錦小路室町で生れた。好学の人で、寛政九年本居宣長の門人となり、宣長歿後は荒木田久老に教を乞うた。同志長谷川菅緒、近藤重弘、湯浅経邦、大橋長好等と諮って鐸舎を開き、古事記其の他の古書の解読を行い、春満・真淵・宣長の肖像を掛けて其の霊を祭る事などをして、大いに古学の普及に努めた。藤井高尚等も此れに応援して一時盛んであったが、文政九年頃には此の会も漸々下火となって、千楯は村田春門にその継続を相談した事が村田春門の日記（無窮会蔵）に見えている。文政九年三月二十七日の条である。而して四月二十七日には春門が鐸舎の会を引受けて第一回を行った事なども見える。

著書としては本書の外に、『雑言通載抄』四巻、和歌『ふるの山ふみ』四巻、『学の広道』等が知られている。弘化二年九月二十一日歿した。享年六十八。京都東山黒谷に葬られた。

桂林漫録　二巻

桂川中良　著

本書は巻初に藤貞幹の『好古小録』を引用、「石敢当」の記事を掲げ、以下文墨・書籍・碑銘・古瓦古印・金沢文庫・足利学校等考古学上の記事凡そ八十許りを収め、挿図を加え理解に便を与えている。才人である中良の考古随筆としてまとまっている。金沢文庫の印の朱は仏書、儒書は黒肉と云うのは、今では必ずしもしからずと云う事になっている。『節用集』『新撰字鏡』『平他字類鈔』などを

挙げて、此の方面にも著者の興味が深かった事が窺われる。燕沢碑などの拓本も時に見る事もあるが、本書に不明の字の註解のある事は、大変便利である。安徳天皇の御物と云う鎧を、春田永年、中村仏庵、村田春海等と共に熟覧している。此れ等の人々とも交流があった事が知られる。御家芸の蘭学はもとより、平賀源内の門人として洒落本、黄表紙にも手を染め、其の才の豊かなことが知られる。この事は又本書によっても窺われる。

本書には、寛政十二年の姫路侯酒井忠通の序文と、令兄桂川甫周の序文があり、巻末には葛西因是及、氷斎鉉と云う人の跋文が添えてある。鉉と云うのは本文中古印の所に北条鉉とある人であろうか。

桂川中良の略伝は、第二期八巻の「反古籠」の解説に略記しておいたから、ここには再録しない。然し。其の節、つい書き落した矢島玄亮稿「森島甫斎―その蛮語箋と著作目録一覧表稿」（文献第十四号所収）の記事と、吉田祐暉彦稿「森島中良の人と文学」（『国学院雑誌』55の4）のあった事を附記しておく。

柳　亭　記　二巻

柳亭種彦　著

『柳亭記』の書名は恐らく後人の命名であろうとされている。本書中には文政九年刊の『還魂紙料』の名の見えている所を見ると、其れ以後の著作と云う事になろう。国会図書館に写本が蔵されており、明治になって既に『百家説林続編』に収められ、次いで本大成に収載せられて流布している。内容は『足薪翁記』（二期十四巻所収）と同様此の著者の好みに応じた雅味のある考証随筆で、親しみ易い記事が多い。上巻は「田植うた」以下五十条、下巻は「立かゝし」以下五十一条である。江戸時

代流行の遊技、歌謡、俗諺、調度等に関するものが多く、挿画もあり、我々身近な興味を感ずる事である。一例を挙げると「〇芋の定価」として、

天明寛政頃の童の毬つく歌に「いも〳〵いも〳〵芋屋さん、お芋は一升いくらぢゃへ、二十四孝でござります、十六羅漢に負かさんせ」と歌ひしは、およそ二十四文が一升の定価にて時として十六文にも売る事ありし故なり。文化の頃になつては、二十四文でござりますとのみうたふは、十六文に買ふ事なければなり。天保のはじめより三十二文でござりますと歌ひ、天保九年の春より六十四文でござりますと歌ふ、一升の価百余銭になりたれども語路わろきゆゑか、それをばうたひしを聞かず

とある。所が明治の末私の姉や近所の小共が毬つきにうたったのは。この同系の歌と思われるのが次のようである。「ひやふみやよいつむなゝやこのとお、天から落ちたお芋やさん、芋屋さん、お芋は一升いくらする。三百五文にまけてやろ。もちつとまからか、すちやらかぽん、笊おだし、枡おだし、俎庖丁出しかけて、頭を切られる八ッ頭、尻尾を切られる唐の芋、隣のおばさんお茶あがれ、あとでおならはごめんだよ。ぷうぷうふう。これでまづまづ一かんおんかしもうした。おたゝのたったのた、ひいふうみ。」

「これでまづまづ」以下は他の毬唄にも最後につく囃し言葉である。此れは勿論明治末期頃の芋の定価ではない。明治三十五、六年頃の最低の通貨は、今の十円ほどの大きさの五厘銅貨であった。然し一文と云う言葉に残っていて「お物もらひの乞食はみつともない。一文もらつて、かんかん」などと囃して遊んだ記憶がある。少々余談が長すぎたが、此のような小供の口ずさんだ言葉も、だんだんなくなってしまうのではないかと考え附記して置いた。芋も石焼芋と声を張上げて売り歩き、グラム勘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

定で、少々大きいのは百円もすると云う現代から考えると、正に世を隔てた感が深い。ついでに次の項を見ると、「〇不入計」と云う項に、武州荏原郡不入計(いりやまず)村と云うのがある。この読み方の考証であるが、此れも今では「大田区中央」となってしまった。時代と共に身辺の変化を思わせる事である。

柳亭種彦の小伝は二期十四巻の「足薪翁記」の解題の末に記したから、それを参照せられたい。

尚古造紙挿　二巻

暁鐘成編

本書は上下二冊美濃版本で、其の奥附の所に、

「尚古造紙挿　後篇二冊近刻」

文政十二年庚寅八月発行　　雞鳴舎「鹿廼家蔵」

とある。この雞鳴舎は木村明啓(あきひろ)こと狂名暁鐘成の舎号である。本書の内容は「宝永二年伊勢御影参の古図幷ニ御奇瑞記録、同参宮人え施行の種類人数書」の写しを初めとし、古い江戸図に見えた吉原、禰宜町、堺町の考説を挙げ、下巻に至っては、「竹本筑後の芝居上るり、曾根崎心中辰松八郎兵衛口上の写」「宮古路豊後稽古本の写」「どうけ百人一首」「扇屋夕霧の文並襠の模様寸法」「元禄五年出版の年代記」其の他の古記録の写し等を模刻したもので、好古の士の一覧に供したもの、風俗史研究等にも好資料を呈している。後篇の予告はあっても、それは発行せられたか否か不明である。編者暁鐘成については、旧刊本大成二巻の「雲錦随筆」の発行の後、菅竹浦氏より、其の略伝の示教があって稍詳になったので、今は其の記事を掲げて同氏の厚志に報いたいと思う。

著者は大阪の人なり。本姓木村氏、名は明啓(あきひろ)、弥四郎と称す。狂名は初め暁鐘成、晩年に暁晴翁と云ふ。また未曾志留坊一蟬、鶴鳴舎（一に云ふ鶏鳴舎）、漫戯堂の戯号あり。大阪元福井町和

泉屋太兵衛と云ひ、醬油の醸造を業とす。前庭に萩を栽ゑ、幼鹿を飼養せしに因り、戯名を鹿の舎真萩とも称す。性放縦にして戯作を好み、巡島記の続編をも綴れり。又画を巧にす。一年丹波福知山に遊び、蕩主朽木近江守の失政あるに会し、百姓一揆の為に檄文を草せしことに因り牢獄に繋がれ、万延元年庚年十二月十九日獄中に死す。年六十八。伝へ云ふ。摂州西成郡正覚寺に葬る（一に大仁村正楽寺）、今その所在を詳にせずといふ。淡路国名所図絵、金毘羅参詣名所図会、天保山名所図絵、猪著聞集等の著あり。（名人忌辰録、竹浦楼主人著狂名弁異。）

宮武外骨著『浪華名家墓所一覧』を見ると、「後年難波鉄眼前に住す。終に旧地福井町にて歿す」とある。著書には「西国三十三所名所図会」「東山名所図会」「摂津名所図絵大成」「淡路名所図会」「小豆島名所図会」、其の余枚挙するに遑あらずともある。「摂津名所図絵大成」は『浪速叢書』の第七巻八巻に収められている。而して第十一巻には「稿本随筆集—晴翁漫筆」があり、十巻の木村敬二郎著「稿本大阪訪碑録」にも其の略伝があったかと思っている。今皆手許にないので参照しないが、活字本で流布しているから、此れ等を見られたら更に木村明啓のことは詳かになろう。

目次

春波楼筆記……一
瓦礫雑考……七九
紙魚室雑記……一八一
桂林漫録……二七七
柳亭記……三三三
尚古造紙挿……四〇七

（解題　丸山季夫）

春波楼筆記

春波楼筆記

司馬江漢著

○治久しく続きぬれば、美を好み奢に長ずる者なり。奢とはいつ奢るともなく、目にも見えず年のよる如く、いつ老ゆるとも知らず、いつ奢るともしらざる者なり。

○画は書と同物と云ふは、古の風俗を、今目前に見るは画なり。頃日寛永年中の画を見しに、女の帯は絹布を半巾にして、結びめなし、振袖は二尺に足らず。頭に櫛笄かうがいはなし、油も水油のみにして、今の伽羅の油と云ふはなし。此一事を以て知るにあり。吾国物産限り有り、故に禄限りあり、天下一体上貴人より下の賤しきに至るまで、懦弱となり、遊楽美観を好み、是れ内より乱れ敝るゝ基なり。今既に如斯、爰に於て、下をしひたげ、民これが為に困窮す。竟には動乱起れば、必、外国其虚を窺ひ来らん。遠き慮りなき時は必近き愁あらん。

○米穀価安くして、諸家困窮する事は、甚しき間違なり。五穀成就するを豊年と云ふなり。豊年を以て困窮する事、表裏のさたなり。爰を以て奢りたるを知れり。小子幼時、米穀価六十目に一石五六斗余なりき、今は漸く一石なり、定相場といふべし。今年も天気順道にして、又々豊作疑ひなし。先年凶年打ち続きて、俄にもみ倉建つ、芝宇田川町加藤庄次郎とて、甚世事に才ある者にて、算筆は云ふに及ばず、諸芸に達したる者なり。商賈にもあらず、千金の地面を持ち居て、是にて暮し居けるが、もみ倉の役人となりぬ。甚調法に思はれ、倉ふしんまで彼がかゝりとなり、或とき予に対して云ふ。俵数の事など咄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.